

コロナ渦と卒業の歌

副会長(名古屋市立守山西中学校教諭)

塚寄 崇史(S60卒)

私は昭和60年3月に名古屋音楽大学音楽教育科を卒業し、4月に名古屋市立の中学校に赴任しました。私は3年生の担当となりました。管理職の先生からは、「ベテランの先生うちの生徒を歌わせることが難しかった。音楽室から歌声を聴かせてくれ」と言われ、力づくで歌わせようとしたり、指導のつもりがただの喧嘩になったりの戦いの日々。名古屋市の教育課程の存在すら半年後に知る有様です。その年、卒業式の合唱は「仰げば尊し」だったと記憶しています。しかし無事卒業式を乗り切ることしか考えておらず、どんな合唱だったかよく覚えていません。

翌年1年生の担当となり、その後幸運にもほとんどの年が学年持ち上がりで受け持たせていただきました。それからはいつも「3年後の卒業式に生徒が合唱している姿」を意識して指導してきました。合唱曲は「大地讃頌」にあこがれ、しばらく続けました。その後「旅立ちの日に」「手紙～拝啓十五の君へ～」「時の旅人」「あなたへ～旅立ちに寄せるメッセージ～」など学校事情に合わせ1～2曲歌って卒業させました。

令和元年度、後にコロナ渦がやってくるとは夢にも思わない中学2年生。3年生を送る会では「友～旅立ちの時～」を歌うため、授業や学級活動で練習をしていました。その矢先に未知のウィルス新型コロナウイルスの出現。その年の卒業式は在校生の参加は中止。そのまま休校となってしまいました。

休校のまま令和2年度の3年生として進級。休校明けも市教委からの通達により、「マスクをとらない、2m離れる、リコーダー等管楽器は自粛」などさまざまな制限が課せられました。そんなとき、「めいおんの会」の仲間とメールやSNSを通じて、お互いの状況や対策を情報交換し合い大変参考になりました。本校は合唱コンクールをホールで開催していましたが、この年は体育館に2クラスずつ移動し、テレビ中継しました。

年も明け、いよいよ受験と並行して卒業準備。しかしながらまたしても通達。本校の規模では体育館内で歌唱することは許されませんでした。学年主任でもある私は学年集会を開き、泣きながら「卒業式で歌うことができなくなりました」と話しました。一体何のための3年間だったのだろうとも思いました。伴奏候補者も指揮者候補者もその他の生徒も一緒に泣きました。

国歌と校歌を有志生徒で録音し、当日流しました。淡々と卒業式は進み、卒業生退場。最後の学級活動が終わり、運動場に整列。私は号令台に立ち、最後の点呼をとった後「友～旅立ちの時～」の伴奏を放送室から流しました。皆2m離れて一生懸命歌い、保護者は手持ちのカメラで撮影しました。こうして令和3年3月の卒業式を締めくくることができました。今でも感動しています。

◆会員の異動◆8月1日現在、めいおんの会把握分(SHR卒年)名古屋市立は市名略、愛知県は市町村名記、他は都道府県名記
【教諭(本務)】 <退職>守永洋子(58)豊国中 <転任>小林千加(H2)富士見台小→白沢小、笠羽真澄(H18)滝川小→平和が丘小、<新任>原美翼(R2)田原・赤羽根中、増田夕里香(H31)三重・陽和中
【講師】 <転任>横幕みゆき(59)大坪小→山根小、出井令子(62)岩塚小→豊臣小、渡邊宏美(H9)大和小→見付小、森佳美(H10)高針小→宮前小、梶田ゆき子(H29)岐阜・根本小→岐阜・南ヶ丘中
 <新任>山田佳苗(R3)春日井・西部中、小林和記(R3)三重・関中、小田雅(R4)長野・白馬中

♪♪令和3年度 研修会のご案内♪♪

【日時】 8月28日(土) 10時00分よりリモート形式

【会場】 名古屋音楽大学 ホールDO

【研修会】 『ジャズへのお誘い』 講師：名古屋音楽大学講師 小濱安浩先生(ジャズサクソ)・卒業生

令和2年度に予定していた研修会です。コロナ禍のため、リモート形式で行います。会員の皆様は事前にお知らせしました案内に基づきご参加ください。なお、校種別研修会は中止し、総会は役員会の議決に替えさせていただきます。

教員生活を終えて

前名古屋市長立豊国中学校教諭 守永 洋子(S58卒)

ピアノと吹奏楽とオーケストラ。大好きな音楽にも様々な魅力があることを知り、「音楽好きな子どもが増えたらいいな」という思いで、教員を志しました。

私が教員になりたての頃は荒れた学校が多く、中学生の溢れるパワーが、校内暴力や家庭内暴力という形で表れていました。そんな中、私が生徒と関わる時に大切にしてきたことは「本気で向き合う」ということです。生徒達の心を掴み、彼らの心が教員の方に向いていなければどんなことを伝えようとしても、教えようとしても届けることはできないと感じていたからです。

月日が経ち、現在の中学生の様子はずいぶん変化したと感じます。しかし、「本気で向き合う」ことの大切さは昔も今も変わらないと思っています。本気で心配し、彼らの話に耳を傾け、心の声を聴く。それは容易なことではありませんが、そこから信頼が生まれ、意思の疎通ができ、授業にも日頃の生徒指導にも生きてくると考えます。

自分の子育てをしながらの勤めは、きついことも多々ありました。「あと少しできりがつく」仕事を保育園の迎えの時間ぎりぎりまでやり、家に持ち帰って睡魔と戦いながらこなすこともあったり、幼い頃はたびたび熱を出し、急遽迎えに行かなければいけないこともあったりしました。「すみません」という言葉に対して「いつか恩返しをすればいいんだよ」と言ってもらい、とてもホッとしたことも忘れられません。

現在コロナ禍で、今までに私たちが想像したこともない状況にあります。後進の方にはまた思い切り発声できる未来を信じて、音楽の魅力を伝え続けていただきたいと思います。

教員になって

三重県亀山市立関中学校講師 小林 和記(R3卒)

私はこの春から地元の亀山市の中学校で常勤講師として勤務しています。その中学校では、音楽を教えるだけでなく、臨時免許にて社会を教えたり、特別支援学級で教えたりしています。

初めは、音楽を教えるだけでなく、様々な教科を教えることになり、こんな私が音楽以外を教えるでもいいのだろうかと思ひ、困惑していました。しかし、生徒のために少しでもわかりやすく教えようと勉強したり、授業内で興味を沸かせるような工夫をしたりするうちに、音楽以外の教科でも自分なりの授業をつくっていくことができるようになりました。また、私は大学時代に教員免許取得と並行して音楽療法士の勉強もしました。そこで学んだ「ニーズに合わせた教育」を生かして、特別支援学級での授業では生徒の個性に合った授業をつくらうと努力しています。

部活動は、バレーボール部の副顧問を務めることになりました。私は中学校・高校どちらも吹奏楽部に所属しており、運動部の知識が全くありませんでした。それでも、部員たちと一緒に全力でバレーボールをしていくうちに、バレーボールのコツや、スポーツすることの楽しさを感じることができました。

4月から、自分の夢である「中学校の先生」になることができました。しかし、バレーボールを教えることは、全く想像の違うもので、こんなハズジャナカッター！と感じる時もありました。

「やったことのないことにチャレンジできる」と考えて過ごしていくうちに、この新しい日常を楽しむことができました。また、音楽教育ではない音楽療法や様々な知識を持つておくことは、教員になるにあたって、とても強い武器になると感じました。私は、これからどんな場面に遭遇しても、前向きに考えて、どんなことでも楽しんでいきたいです。

【編集後記】

◆昨年度に続いてコロナ禍での音楽の授業。現場の先生方は、制約のある中でそれぞれ工夫をされておられることと思います。コロナ禍における音楽の授業については、教育雑誌等でも紹介されていますが、本会でも会報やHPに情報を提供しております。◆コロナ禍の今、手洗い、換気といった感染症対策のほかに、子どもたちへの心の対策が求められています。子どもたちの心が少しでも豊かになるよう、昨年度は中止せざるを得なかった行事も本年度は工夫を凝らして実施する学校が増えているようです。◆本年度から、中学校でも新学習指導要領が実施され、「評価」も3観点になりました。このような時であればこそ、会員相互の交流が一層活発になることを願っています。(ゆ)

